





目まいのする散歩

武田泰淳



中央公論社

目まいのする散歩

昭和五十一年六月一日初版印刷
昭和五十一年六月十日初版発行

著者 武田 泰 淳

発行者 高 梨 茂

印刷 三 陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

©一九七六 検印廃止

目次

目まいのする散歩

5

笑い男の散歩

33

貯金のある散歩

65

あぶない散歩

93

いりみだれた散歩

125

鬼姫の散歩

159

船の散歩

191

安全な散歩？

225

目
ま
い
の
す
る
散
歩

装
幀
司
修

目まいのする散歩

六月の午前七時、久しぶりの好天氣に誘われて、山小屋を出る。医師に禁じられた酒をのむと、ついふらふらと無理がしたくなる。外出する必要は全くないのに、庭の坂を上りつめて、門の外へ出た。多少の努力感はあったが、警戒していたための現象は起らない。自動車道路まで行ってみようと歩きだす。まだ大丈夫である。自動車道路は坂道になっているので、スピードを出した車がくると危険である。横断すると上り道になり、その先に石山がある。石山まで行く途中は舗装されていないで、雨に洗い流された石がごろごろしている。そこまで行きつけば、西湖の村々が樹海の遙か彼方に見渡せる。石山の向い側は西洋人の別荘であるが、人の気配はない。西洋人が一家できているさいは、目はしのきく西洋人の子供が顔を出して、

石山で眺望を楽しんでいる私を面白がるか、それとも怪しむかして、様子をうかがいに近よってくるので、気が静まらない。石山というのは、頑丈な岩盤をダイナマイトで爆破したあとであり、大きな岩がわれて積み重なっていて、異様な風景である。その一段低い前側がブルドーザーでならされていて、樹木の生い茂った沢に面している。そこは、どういうものか草が生え茂らないで、溶岩の台地をいつもむきだしている。遠くの低地からふき上げる風が心地よい上に、特別上等な場所と思われて爽快な気持になる。いままでやったことはないが、座禅の真似をして坐りこんだ。座禅に対しては、わざとらしくて一種の抵抗を感じたが、誰もみていないことだし「自分は座禅をしているわけではない」という心づもりもあったりして、自然にあぐらを組んだ。二、三度尻の下に加減をみてから、じっとしていると、足を投げだしたり、揃えたりして普通に坐っているよりも具合がいいように思われた。富士山は、今上ってきた坂道の正面に頭をのぞかせているはずだった。坐っている場所からは、全く見えないはずだし、第一、富士山には背をむけて坐っている。やが

て、立ち上るとめまいがきた。「やっぱり思ったとおりだ。そんなにうまくいくはずがない」と考えながら（考えるといつては、どうも意味がはっきりしすぎていて、本当は、もっとぼんやりした感じだが）しゃがみこむ。まだ体が不安定で、揺れ方がひどいので、そのまま、地べたに仰向けに寝てみた。凸凹した地べたは寝心地がいいとはいえないし、自分の恰好が適当か否かも、よく定めがたいが、他人に迷惑をかけるわけではなし、その瞬間の自分にはふさわしいやり方だと思った。目をつぶっているので、あたりは暗くなったが、別にひどい状態がきたというわけではない。あんまりいいざまではないと感じて立ち上ろうとしたが、やはり駄目だった。鳥の啼き声は、あいかわらずしている。陽もよくあたたっている。少し待っていれば、やがて元通りになる、という自信があるので静かにしていた。

『中央公論』の新人賞の選者にえらばれたのは、伊藤整、三島由紀夫、それに私の三人だった。その二人は死んでしまったが、一人はガンを患っての病死だし、一人は割腹自殺だった。一人はひっそりと冷静に（と外部には想像されたが）死を迎え、

一人はその自殺した日がいつまでも忘れられないほど、よく晴れた十一月に、一世を驚愕させて、はなばなしく死んでいった。私はどんな死に方がいいだろうか、と冗談めかして話題にしたときに、二人とはちがった死に方をするすれば、殺される、刺殺される、処刑される、あるいは誰にもわからぬやり方で抹殺される死に方がいいだろうとしゃべったことがあった。理くつはその通りだが、殺されるチャンスなど、私を訪れるはずもなかった。だが、今、何の苦痛もなく、ただ寝そべっているだけの自分を発見したとき「恍惚死」ということが思い浮んだ。「恍惚死」といえば聞えはいいが、ボケて死ぬことである。そうなれば、自分にとっては大へん楽で、じたばたしないでもすむことである。しかし、なんぼなんでも、私のような人間が、そのような安楽な死を遂げられようとは信じていなかった。深沢七郎氏が「武田さんはきつと死ぬときには、あわてず騒がず死ぬでしような」と真剣に質問したとき「いや、とんでもない。僕は必ずじたばたして死ぬにきまっているよ」と答えたことがあった。

こい、ゆい、けい、か、き、じ、か、大きな羽音をさせて舞い上ってから、すぐ舞い下りて地面を歩く鳥の足音が聞えた。自分の病状を他人に説明するよい手がかりができたという判断がわいたのだから、つまり、自分の病気とか、死とかを、自分で演出してみたい気持ちが多少あったのかもしれない。私は演出とか演技とかは、苦手なタチで、その点は、とおく三島氏には及ばなかった。それ故、意志や能力なしに、演出や演技に近づけるものなら、これに越したことはなかった。

三度めか、四度めに立ち上ったときに、めまいが消えたので、坂道をひき返そうとして、十歩ばかり歩くと、また、めまいがきた。出来るだけ、ゆっくりと右に左に傾きながら歩いた。そして、また、しゃがみこんだ。今度は、ねころんだりしないで、どうやら保つことが出来た。自動車道路を一気に横断して、両側に樹木が茂っているところで、また、しゃがみこんだ。ガードマンを二人乗せたジープが走ってきて、しゃがみこんでいる私のすぐそばで止まった。一人が降りてきて「別荘にいらっしゃったのですか」とたずねた。私は別荘客にはふさわしからぬ服装をして

いた。上着もズボンもどちらかといえば、土地のじいさんのような姿だった。だからガードマンは特に「別荘にきていらっしゃるのですか」と怪しんだにちがいない。私は姿勢正しく立ち上って、「二四一号の武田です」と出来るだけ明確に答えてから、二人がジープに乗りこむまで、その様子を反対に確かめるように、取調べでもするように見つづけていた。そのうちの若い方には見覚えがあった。「富士」執筆に熱中している頃、熊が一頭、庭を横切ったことがあった（もしかしたら、その頃から幻覚がはじまっていたのかもしれないが）。女房が管理所に報告に行くと「えッ、熊が」といって熊狩りに参加しなかったのは、そのガードマンだった。浅間山荘事件がテレビでうつしだされる頃で、このあたりの別荘地も警戒しているらしかったが、あのガードマンでは、一人の学生もつかまえられるまいと思ったりした。そのとき、また、めまいがしてきたが、それを見とがめられるのがいやなので、彼らが走り去るのを待ってから、また、しゃがみこんだ。家の門から、家にたどりつくまでの間に、まだ、二回ほど休まねばならなかった。坐りこんだまま、手の届く限

り、あたりの草を、やたらにむしりとった。まだ、むしりとらねばならぬ草が沢山生えてしまっていて、庭が汚くなることが気がかりだったからだ。

「すべてのことは、たいがい無事にすむものだ」と、いつも通りの結論に達した。そして、散歩というものが、自分にとって、容易ならざる意味をもっているな、と悟った。

東京にいるとき、私の散歩する場所は、明治神宮、武道館、代々木公園の三つに定められている。その三ヶ所ともに駐車場があり、車が走っていず、坂がない平地だからである。いろいろ思い合わせてみて「あらかじめ定められた散歩」という名文句、あるいは題に思い及んだ。散歩という意味を広く解釈して、人間の運命は生れたときから、あらかじめ定められているというようにうけとれもするし、地球のどこかに住みついているからには、散歩とか旅とかいっても、あらかじめ空間的に

決定されている行動範囲は、どうせ限定されているからだ。

上にあげた三つの場所は、どれも、私の現住所である赤坂から十分せいぜいでゆける。車を降りて歩きだせば、そこが申し分のない散歩の範囲である。

明治神宮には外人旅行者が多い。私が明治神宮を散歩の一つにはじめて選んだ頃は、日本人の参拝者も、外国人の旅行者もまれであったのに、年毎にその数がふえだして、時間と週日によっては、外人の方が一般人よりも多い位である。彼らは多くは団体客で、無料休憩所のある参道の中ほどから、つながって現われてくる。外人女たちの服装は遠くからでも目立つし、去年は明るい赤色の衣服が多いとすれば、今年はグリーンのパステルカラーが多いといった按配で、もしかすると日本の流行の先端は彼女たちの服装から予定出来そうだった。外人専用の観光バスのコースの最初の地点に指定されているのかもしれない。最初の地点であるため、みな午前中の元気がまだ一杯なので、その声も楽しげに高く響くのだった。

私は守衛さんの立っている駐車場（それは、車をとめてはいかがかと思われるよ